
我々共が夢の跡

ハチエツト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我々共が夢の跡

【Nコード】

N3879Z

【作者名】

ハチエツト

【あらすじ】

辺境の貧しき国、ヘイムズを踏みつけ空を貫く巨大な影。

誰とはなしに人々はその影を魔王と呼んだ。

魔王来訪から三年後、ある者はいずこかへ消えたヘイムズの民の残した財宝を狙い、ある者は栄光を求め、ある者は失った者を再び手に入れるため、ある者は力を求め、ある者は正義のため、ある者は何者かに導かれ、再びその地に人が集う。

しかしその地は既に人類のモノではなかった。

泥の雨に打たれ、吹き荒ぶ風に吹かれ、険しい山々を超え、魔に

飲み込まれ、一つまた一つと命の代償は払われる。
それでも人々の歩みは止まらない。

魔王来訪の地、魔都ヘイムズを巡るダークファンタジー。

魔都ヘイムズ

人の子よ何故。

「おい、なにか言ったか？」

至近距離にも関わらず、耳を劈くような雨音に負けじと大声でガラクシーが叫んだ。

「僕はなにも。だけど学者先生、ここじゃ誰も何も言っていないくても人の声が聞こえるなんてしょっちゅうだ。で、そういう時は隠れてやり過ごすのが一番なんだ」

「休憩はさつきしたばかりだろう！」

「僕の指示に従え先生。少し戻れば教会があつたな、そこまで戻ろう」

「五歩進むたびに四歩戻らなきゃいかんのか？ これじゃいつまで経っても目的地に付かんぞ」

「今日は特別だ。さつきから何かが妙に、畜生め、騒がしい。まるで蜂の巣を突いたみたいだ」

言葉で説明出来ない、暗澹たる不安がブツチャーの胸中に去来する。具体的に、どう危険なのか、なにがおかしいのか、口に出せないのがもどかしい。

それはたとえば、数メートル先の景色の色が、わずかに赤みがかっているように見えるとか、雨音が僅かに耳に重く残るだとか、足を跳ねる泥がいつもよりも高く飛んでいる気がするだとか、そういった些細な他愛のない違和感の集合体だった。一つなら良いが、それがいくつもあると、予想もつかない良くないことが起こる気がする。

笑ってしまうほど漠然とした不安感だが、それを無視するわけにはいかなかった。

「先生、今日はダメだ」

「ダメ？ くそ！ 私は君に、確かに報酬を払ったよな？ きつかり、銀貨三枚！」

「僕があなたに頼まれたのは、貴方を安全に『裏ドアの砦』に案内することだ。そして今強行すると、永遠に辿り着かない可能性がある」

ガラクシーは不満げに唸り、やがて渋々と言った調子で言う。

「倍の報酬を払ってもいいぞ」

「ダメなものはダメだ。僕を信用してほしい。報酬は最初に交わした契約のもので十分だ」

一度頑なに口に出してみると、不安感はずすまです確信めいてきた。逃げなければならぬ、それも、可能な限り早く。

「急げ先生。引き返すぞ」

「まったく、ままならんな」

ガラクシーは不満を口にしながらも、結局はブツチャーに従った。

来た道を引き返し、僅か五分の出来事だった。一寸先の視界を覆わんばかりの雨に紛れ、それはやってきた。

「止まれ、誰だ」

前方に人影。ブツチャーは即座に手斧を抜き、後に続くガラクシーを手で制した。

輪郭以上のものが見えないのは雨の所為かと思ったが、そうではなかった。それは確かに人影だった。

人影以上のものではなかった。

縁だ。

雨の中に人間の形をした輪郭を認識出来る。それは決して、現実の眼で見えているものではなかった。縁なのだ。そこに人間の形をしたものがある、ということだけはハッキリと判るのだが、音もなければ、匂いもない。形すら、実際には見えない。

「畜生め。そんな馬鹿な」

ふと意識を向ければ、その影は既に無数にあった。囲まれている

……というわけではない。影たちは各々の進むべき方向へと歩いて、こちらのことは全く意に介していない。

「ブッチャー？　これは？」

ガラクシーが不安そうな声を上げる。

「人影が見える……存在が希薄だ……早々に私もいかれたか」

「フラッシュバックだ！ 先生走るぞ！」

「ああ？」

「僕の背中だけを見て走れ！ 来い！」

言つや否やブツチャ―は手斧を投げ捨て、雨に濡れた外套も脱ぎ捨て、泥を蹴つて走りだした。

「ブッチャー！ どういうことだ！ これはなんだ！」

「説明してる暇はない！ 走らなきゃお陀仏ってことだ！ 外套は捨てる！」

「ずっとまだ!？」

[illegible]

影はますます増えていった。大きさはバラバラで、大人のような人影も、子供のような人影もある。並び立つように歩くもの、手を繋いでいるように見えるもの……いや、実際に、ような、ではなく、大人の影と子供の影なのだろう、とブッチャーは思った。

(ヘイムズの記憶)

ヘイズが死んだ後……ヘイズが魔都と呼ばれるようになった後に頻発する現象だ。

一か月に一度、ヘイムズはまさに思い出したかのように過去の幻影を呼び覚ます。（一か月といつても、大体一か月程度に、という意味でだが）誰も直接は口にしないが、あの影は明らかに消えた筈のヘイムズの民の幻影だった。

(だがなぜそう思うのだろう)

もちろん、明確に、あの影が消えたヘイムズの民の幻影だと誰かに教わったわけではない。だが、直接あの幻影を目にしたものの多

くは、不思議とそれを悟った。

それどころか、幻影の中にいると、もっと多くのものが見えるような気さえする。そしてそれを不幸にも実行に移した人間は、例外なく狂い軋み倒れていった。

雨が途端に重くなり、足が空回り始めた。全速力で走っているにも関わらず、汚泥に腰まで浸っているかのような感覚だ。

悪夢に追われているかのようなようだ。実際、このもどかしさも、現実味のなさもそれに近い。

まっすぐに走っているのか、それすらも疑わしい。

（畜生め。なぜ今起こる？ 以前はつい一週間前だぞ？ 教会はどこだ？ 建物に入らなければ、間に合うのか？ 先生！ 先生さんは付いてきてるのか？）

「ブツチャー……待て、待ってくれ……足が」

と、後方からか細い声。

「おかしいんだ……足がなくなっている気がする……」

ガラクシーが走るのを止め、座り込んだ。

「人が沢山いる。祭りだとみんな言っている……音楽が聴こえる……聞いたことがあるな……ああ、そうだ、実は私は、以前……若いころだが、ここに来たことがあるんだ。祭りに参加したんだ。この曲は、ヘイムズの民が好んで、伝統的にだが……弾いたり聴いたりする曲だ。祭りの時はよく流れてる……」

ガラクシーの声は、ほとんどうわごとだった。眼は中空を漂っていて、走ることをすっかり忘れている。

「立て先生！ 置いていくぞ！」

「そうだ、思えば妻と会ったのは、その祭りだった。馴れ初めなんてすっかり忘れていた……十年に一度の大きなお祭りだったらしい結局、なにを祝っているのか、誰も知らなかったが、街中に酒が入っていて……子供もな、その日だけは、飲んでいいらしい」

ブツチャーはそれ以上耳を貸さなかった。先生すまない、とだけ小さく呟き、正面に向き直る。出会った三日程度の間柄だったが、

それでも彼のことは気に入っていた。好んで見捨てたいというわけではないし、もっと致命的な場面じゃなければ、多少なら命の危険だっておかしてもよかった。

だからと言つて、無駄死にはごめんだった。

（貴方は助からないだろう。あとほんの少し状況がマシだったら……きつとあなたをひきずって歩いていた）

今はもう先に進むしかなかった。既に、ブツチャーの耳にも喧騒が僅かに聞こえ始めている。

（あとほんの少しマシな状況？ なにを言い訳しているんだ、僕は。誰も聞いちゃいないってのに！）

高慢なプライドがチクチクと痛む。それでもきつと助けていた、きつと助けていた、と心の中で何度も呟くが、その内は自分自身では覗き込めなかった。

（行かないと、誰にもどうにも出来なかった。誰にも……）

その時、雨間にそれは見えた。十字架だ。こちらを見張るかのよな様子で、高々と、堂々たる姿で。

（教会……こんなに近づいてたのか……）

距離にして、五十メートルはないだろう。が、今や身体に押し掛かるものは重い雨だけではなかった。後方ではガラクシーが突っ伏している。

（出来るだろうか。彼を拾って、教会まで……歩むことが、僕に）無理だ。と残酷な声がする。

実際に、ブツチャーの身体と精神は限界だった。喧騒と、ついには音楽までもがその耳に聞こえてきた。もう戻れない。いや、あと五十メートル歩くのさえ怪しいんだ。と、ブツチャーは声に出したかった。

（いったいそれを誰に聞かせたいんだ、僕は）

済んで、口に出すのだけは堪えた。が、それは身体の中で暴発した。もう戻れない。五十メートルをたった一人で歩くのだって難しい。助けることなど出来はしない。

膝を付き、喘ぐ。息が苦しい。喉を裂けばきつと呼吸が楽になると忠告にも似た声が聞こえた気がして、実際に喉に手を掛けるが、ぎりぎり抵抗した。

誰も助けることなど出来はしない。誰も、誰かを、助けることなど。

人には限界がある。肉体の限界もそうだが、きっと良心の限界だろう。

（見てきたはずだ。ブッチャー。お前が、それを必要とした時に、誰もそれを与えなかったように）

その、自分自身の説得にも似た考えが頭を過った時、ようやくブッチャーの頭の霧が晴れた。歯を食いしばり、再び立ち上がる。

「僕はブッチャーじゃないぞ馬鹿めが！」

そう、心の内に語りかけてくる魔王に向かって叫び、ガラクシーの元へと走った。

魔都ヘイムズ（後書き）

始めまして。ファンタジー初挑戦になります。
どしどし意見、質問、改善点等、なんでもお待ちしております。

魔都ヘイムズ2

ブッチャーはガラクシーを抱えたまま、教会を蹴飛ばした。恐れていたよりもあっさりと扉は開き、二人はその場に倒れこんだ。

外の喧騒が嘘のように、教会内部は静かだった。

（教会か……）

ブッチャーは信仰とは縁のない人間だった。いや、むしろ、貧しい少年時代を過ごしてきた者にはありがちなことではあるが……ある種の敵意を持っていた。

神や伝承が憎いわけではない。信者や、司祭が憎いわけではない。それが生む衝突が憎いのだ。

啓示をお題目に武力を振るう宗教家も憎いし、その事に過剰に反応し、暴力を返す無神論もまた憎い。

（憎しみあわなければいいんだ、憎しみあわなければ……この地を見る、外の人たち……僕たちは欲望のまま傷つけあっているが、まだ健全だ……）

疲労の所為か、思考がまとまらない。雨に打たれ過ぎた所為で寒気もある。打ち捨てられた教会だが、暖炉くらいはあるだろう、とガラクシーを引きずったまま奥へと進む。

「ブッチャー……？ ああ……助かったのか……ありがとう、戻ってきてくれて」

と、驚くほど明朗な声。ガラクシーが目を覚ましていた。

「先生、大丈夫なのか？」

「君のお蔭でね。助かったよ、いい腕だ。君を雇ったのは正解だった。座り込んでいる時は頭の中に霧が掛かっていたが、終わってみればハッキリと思い出せる。酷い体験だった、と、君が戻ってこなければ、そう感じることもさえなかったのだろうな」

「僕自身は……向いてないことはするもんじゃないなと思っていた所だよ」

実際、小遣い稼ぎのつもりで雇われたものの、誰かを守りながらこの地を歩むことが、ここまで辛いとは思わなかった。

「ここは安全なのか？ 教会？」

「別に教会だからってわけじゃない。理由は知らないが、あれは野内では起こらないんだ。ここに在る限りは、あれからは身を守れる。あれからはな」

「他になにかあるのか？」

「なんでもだ。とにかく、今日のことで懲りたなら、以後は……少なくとも、契約通り、皆に着くまでは僕の指示は絶対だ。僕が走れと言ったら走って、しゃがめと言ったらしゃがむんだ。場合によっちゃ、歌えと言い出すかもしれんが、その時は疑問を口に出す前に歌ってもらう」

「私は音痴だぞ」

ガラクシーはやや的違いな返事をしたが、それでも首肯した。

「君の指示には従う。だが、質問をするくらいはいいだろう？ あれは一体なんなんだ？ 人の姿が……おそらくはヘイムズの民が見えたが……」

「僕らはあれをフラッシュバックと呼んでいる。あれは……そうだな、貴方の言うとおり、ヘイムズの民なんだろうな。なぜ起こるのか、実際の正体はなんなのか、誰だって知りはないが、僕らの認識では、あれが起きるのは一か月に一度の筈だった」

「だった？」

「前回は一週間前だ。今回のフラッシュバックは、全く突発だ。予想すらしていなかった。畜生め。今回のことが例外中の例外ならいいんだが」

ブッチャーを含め、この地に訪れている再開拓者はフラッシュバックの発生時期は野外の探索を避けることにしている。発生時期が安定していた分には、ヘイムズの災厄の中では回避しやすい部類ですらあったが、それを裏切られた。

これですます外を歩きづらくなる。

「……明日には収まる。首尾よく行けば、雨も上がるだろうな。出発はその後だ。火を焚いて寝てしまおう。皆にも明日中に着く」

「外ではまだあれが起こっているのか？」

「ああ、そうだ」

「なあブツチャー、あれの中に居た時に……何かが見えた気がするんだ。凄く大切な何かが……」

「そう言っただけで誰も戻ってこなかったぜ。僕は貴方がここに何を探しているのかは知らないが、貴方の探し物のことを、この地は知っている。それは忘れるなよ」

幸い、教会内部は燃料には事欠かなかった。古びた本もあれば、ほとんどの椅子や机が木製のもので、火をつけるのも、それを保つのも容易い。

「そつえば、ここで本名を名乗ってはいけないという理由が判つたような気がしたよ」

炎に影を揺らしながらガラクシーが言う。早めに眠ったほうがいい、と忠告はしたが、寝付けないらしく、とつとつと語り始める。

「ずっと私をガラクシーと呼ぶ声が聞こえていた。ああ、懐かしい声だった。たぶん、母だ。ガラクシーこっちへおいで、と。誘惑に耐えかねてふらふらと歩きかけたが、思えば母が私をガラクシーなんて呼ぶわけがないんだよね。ここに着てから、適当に名乗っているだけの名前なのに」

ガラクシーの言うとおり、再開拓者は決してヘイムズの地では本名を名乗らないようにしている。この地の支配者が……魔王と呼ばれている得体のしれない何者かが、その本名を利用するからだ。

「僕もあの中にいたとき、君を見捨てるように言い聞かせていた自問が、僕をブツチャーと呼んでいた。名前を知られていれば、僕も貴方も廃人になっていたな」

（見てきたはずだ。ブツチャー。お前が、それを必要とした時に、誰もそれを与えなかったように）

その、自問の声がありありと蘇る。今更ながら、何者かに心の中に進入されていた、という事実を思うとゾットした。

「この地、ヘイムズの今の支配者の影響力は、文字通りヘイムズまで、外の世界にまでは手が伸びないということか。つまり、万能ではない」

（今まではな）

ブッチャーはこっそりとそう思う。一つの国を一夜にして消滅させるほどの力の持ち主が、明日にも沈黙を守る保障はない。

「明日には晴れるかな？　ここに着てからずっと雨だったり曇りだったり霧だったり、まだ私は、この地の支配者を見ていないんだ」

「焦らなくても、晴れば嫌というほど見れる。なにしろあれと来たら、冗談抜きで山よりも大きい。で、また一つ忠告だが、あまり魔王を見すぎるなよ」

天気さえよければ、ヘイムズの王城に屹立する、天を貫かんばかりの巨大な魔王の影がここでもいつでも見ることが出来る。ブッチャー自身、初めて目にした時にはその姿に膝を折り、柄にも無く神の存在について考える羽目になったが、それも一ヶ月もすれば見慣れた風景となった。

魔王は、来訪後三年、寝返りの一つすらせずに沈黙を保っている。その姿は影が見えるばかりで、質感すら定かではない。そもそも生き物なのか、それとも別の何かなのか、それすら知るものはいない。そして、魔王の膝元に辿り着いたものも、またいない。

「魔王は、私達の存在に気がついていないのだろうか」

「さあ。気づいていないか、気にしないでいてくれることを祈るのみだ」

「ブッチャー、私は……」

ガラクシーが僅かに息を呑み、それから言いづらそうにだが声を絞り出した。

「あそこに行きたいんだ。ヘイムズが王城、魔王の足元に」

「辿り着いたものなどいない」

ガラクシーの言葉はブッチャーにとって意外なものではなかった。誰も彼もが、そうだ。栄光も金も、奇跡も、全てはあの場所に集結している。

「いないのか？ 本当に？ 誰一人？」

「王城は城壁に囲まれていて、その外は山だ。山間にはフラッシュバックから身を守る為の建物なんてないし、城壁の門は閉ざされている。門に辿り着くための唯一のルートには……橋が……」

「橋？」

「橋だ。やたらでかい、石造りの立派な。あの場所はずっと深い霧に覆われていて、一寸先も見えないような有様でな。以前、熟練の再開拓者が十人がかりで橋を渡ると皆を出て行った」

その中には見知った顔もいくつあった。ヘイムズに着き、右も左も判らぬブッチャーに生きる為の術を教えてくれた、恩師とも呼べる者もいた。

「帰ってきたのは三人。一人は皆で目を覚まし、すぐさま呪詛を吐きながら近くにいた人間に切りかかった。一人はなにとも言わずに首を吊った。最後の一人は……」

「どうなった？」

「いない。どこかへ消えた。僕はそいつを探しているのさ」

魔都ヘイムズ2（後書き）

一週間に一度か、二度程度の更新頻度になりそうです。
長いお話になりそうですが、気の向いた方はお付き合いを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3879z/>

我々共が夢の跡

2011年12月16日20時53分発行